

## ガマはどこまで小形になるか？

角野康郎

(神戸大学教養部)

日本に産する3種のガマ属植物のうち、ヒメガマは、花序の雌花群と雄花群が離れているという特徴によって容易に識別できる。しかし、残る2種のガマとコガマは、肉眼的なレベルでは葉や花序のサイズが識別のための有力な形質とされているのが現状である。主な図鑑類の検索表の内容はほぼ同じで、葉の幅が0.5~1cmであればコガマ、1~2cmであればガマとなる。また、花序の長さによっても、雌花群の長さコガマ6~10cm、ガマ10~20cm、雄花群の長さコガマ3~5cm、ガマ7~15cmと、変異の重なりはないかの如くに書いてある。実際にこのとおりであれば、ガマ類の同定は、きわめて容易であるにちがいない。

しかし、野外で調査を進めてみるとガマ、コガマともかなりの変異を示すことに気付く。特にガマの変異は著しく、草丈が1m余りのものから3m近いものまであり、雌花群も、長さ10cm位のものから30cmに及ぼんとするものまである。このようなガマの変異を理解しておかないと、小形のガマをコガマと同定することになる。コガマがあるというので調べてみると、小形のガマにすぎないという場合が少なくない。ガマとコガマの正しい識別法はいくつかあるが、確実なのは、花粉を顕微鏡で調べることである。ガマであれば、四集粒になっているが、コガマでは花粉粒はひとつひとつ離れている(図1参照)。また花期を比べると、西日本の場合はガマが6月であるのに対し、コガマは7~8月である(ヒメガマの花期はこの中間であるので、ヒメガマの開花前に咲いておればガマ、ヒメガマの

花後に開花が始まればコガマである可能性が高い)。

参考までに小形のガマと本当のコガマの標本の1例を示しておく(図1)。小形のガマは、神戸市西区の休耕田のもので、この集団での変異幅は、葉の幅10~20mm、雌花群の長さ8~20cm、雄花群の長さ7.5~15cmであった。一方、コガマは広島県東広島市の休耕田のもので、葉の幅6~13mm、雌花群の長さ5~14cm、雄花群の長さ4.5~8cmという変異を記録した(なお、葉の幅は、いずれも生品による測定値である。ガマ類の葉は標本にす

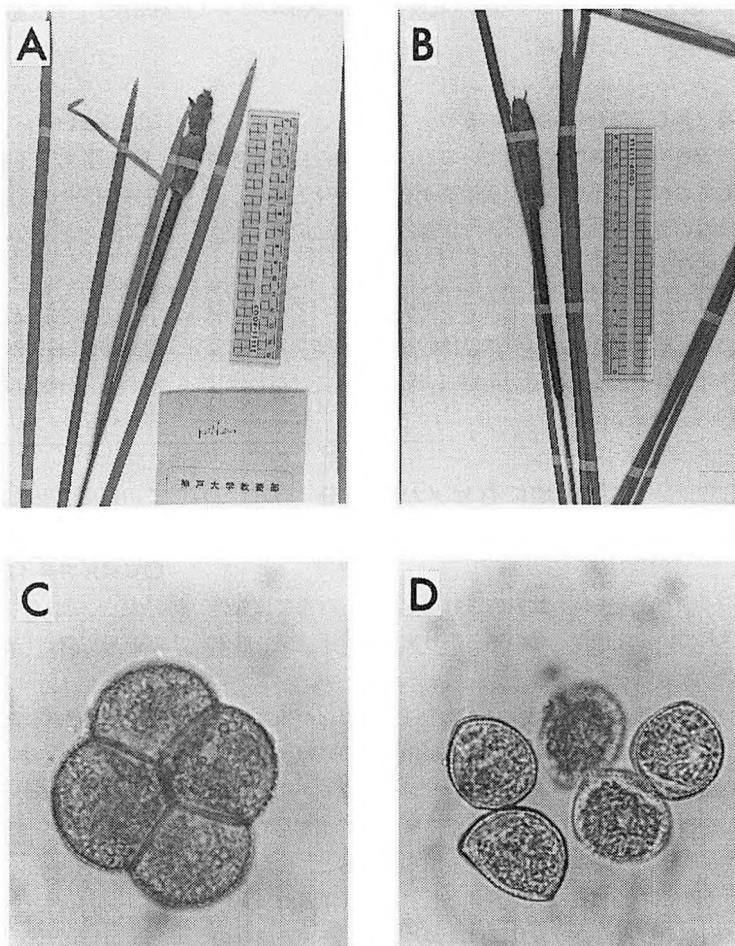


図1. A. ガマ(神戸市西区), B. コガマ(広島県東広島市), C. ガマの花粉(Aの標本のもの), D. コガマの花粉(Bの標本のもの)

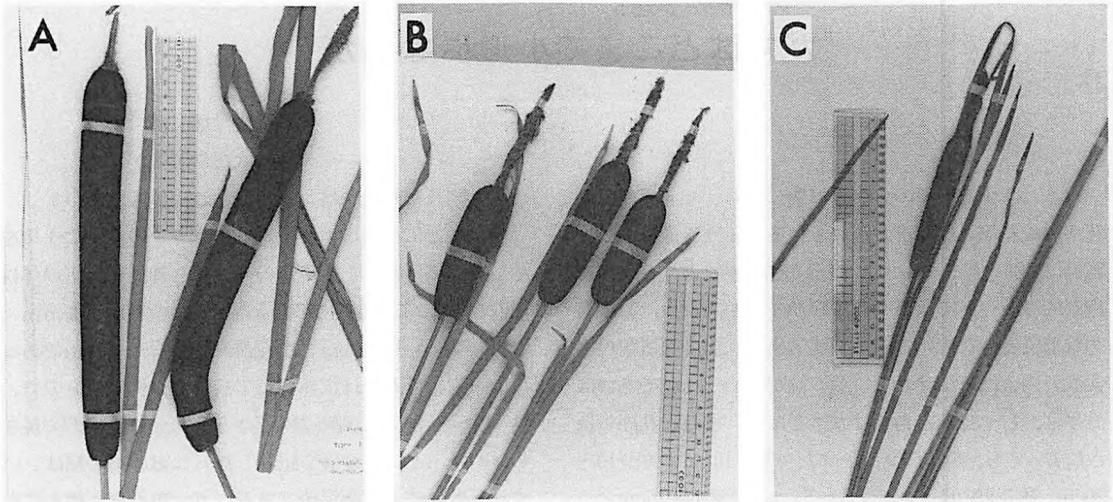


図2. ガマとコガマの穂(花後), A. 大形のガマ(北海道産), B. 小形のガマ(兵庫県産), C. コガマ(広島県産)

ると著しく縮むのが常である)。

これらの変異資料を見ていると、集団内の変異に注意しておれば、小形のガマ個体をすぐにコガマと誤ることはないと思うが、ガマのように身近な植物の同定にも意外な落とし穴があるのである。

なお、最近、ガマとコガマの雑種として、アイノコガマが記載報告された(清水, 1989)。花粉はコガマのように単粒である。雌穂が不稔で奇形になることがしばし

ばあるという。

【付記】もし不審なガマ(?)が近所にありましたら、花序(標本でも生品でも可。できれば花粉のついたもの)を私宛にお送りいただければ、同定致します。

#### 引用文献

清水建美, 1989. 日本産植物数種の新学名. 植物地理・分類研究 37: 120.

## 中国山地にもヒメバイカモ

角野康郎

ヒメバイカモは、比較的まれな水草で、今までに報告されている産地は、私の知る限り宮城県、千葉県、熊本県、大分県のみである。

ところで、中国山地のバイカモ(ヒルゼンバイカモ)の調査を進めていくうちに、島根県と山口県の県境に近い島根県六日市町の高津川にもヒメバイカモが産することを確認した。最初に気付いたのは、1987年8月であるが、昨年、松江の水草研究会全国集会のあと、広島へ抜ける際に寄り道をして現地を再訪してみた(7月31日)。1987年の調査時よりも群落は広がり、ちょうど花盛りの時期でもあったので、見事な光景であった。他の既知産地のいくつかでは、消滅したり消滅寸前の状態なので、

この群落の現状はたいへん嬉しく思えた。

○岩槻邦男著『日本絶滅危惧植物』(海鳴社、1990年3月31日、227頁、1700円)

前号で紹介した『我が国における保護上重要な植物種の現状』(レッド・データ・ブック)とあわせて読んでいただきたい本である。何が植物を絶滅の危機に追いやっているのか。そして、その現実に直面して我々ひとりひとりが何をなすべきか。著者は切々と訴えている。

(角野康郎)